

知的障害特別支援学校教員を対象としたサヴァン症候群に関する調査研究

Research on Savant Syndrome to Teachers of Special School for Intellectual Disability

楊 一 凡* 井 澤 信 三**
YOU Ichibon ISAWA Shinzo

本研究では、知的障害特別支援学校の教員を対象にアンケート調査を行い、特別支援学校教員のサヴァン症候群に関する認識、サヴァン症候群的な特徴を持っている子どもの症状、それに対する教員の指導・支援の工夫等について、明らかにすることを目的とした。結果、230名からの回答が得られ、そのうち、サヴァン症候群を認識している教員は130名であった。また、サヴァン症候群的な特徴を有する児童生徒と出会ったことのある教員数は76名、出会った子ども数は127人であり、それらの子どものサヴァン症候群的な特徴としては、記憶力（46人）、芸術（42人）、カレンダー記憶（26人）等であった。指導・支援における留意点としては、「自己肯定感」と「能力を高める」ことが重視されていた。さらに、サヴァン症候群的な子どもが有するつまずきや困難は、自閉症の有するそれとはほぼ同質であり、サヴァン症候群的な特徴を有する子どもへのオリジナルな支援・工夫は少ない現状であった。

キーワード：サヴァン症候群 知的障害 自閉症 特別支援学校教員

I. 問題と目的

「サヴァン」は「全般的な知的障害を示す一方で、記憶、数学、芸術などの特定の領域で並外れた能力・スキルを示す人（Treffert, 1989）」や「知的障害と、特別な才能を併せ持つ人々（Pring & Hermelin, 2002）」に代表されるように、サヴァン症候群（savant syndrome）は、これまでのいくつかの文献を概観すると「知的障害、自閉症などの発達障害等のある人が、その障害とは対照的に優れた能力・偉才を示すこと。たとえば、ある特定の分野の記憶力、芸術、計算などに、高い能力を有する人」と捉えることができる。高畑（2015）は、過去に報告されたサヴァン能力の実例を「驚異的な記憶力」「音楽的才能」「計算能力」「知覚、運動、芸術」「時間、空間的認知に関する才能」の4つに整理している。また、(1)並外れた記憶力を要する能力が多い、(2)右半球と関連の深い能力が多く、一方で、言語能力や記号能力などの左半球に関連の深い認知機能の障害が共存する、(3)自閉症スペクトラムとの関連が深い、(4)能力は特定の限られた分野に偏在する、という4点を共通項として挙げている。しかし、サヴァン症候群の定義はきわめて曖昧であり、正式な診断基準はない（西山・納富, 2008）といった現状もある。

定義等に不明瞭さもあるサヴァン症候群であるが、自閉症児者の10人に1人がサヴァン能力を保持していると報告されており、自閉症児との関連は高い（高畑, 2015）。一方、自閉症だけではなく、ウィリアム症候群、Prada-Willi 症候群、Gilles de la Tourette 症候群、頭部外傷など、さまざまな疾患に出現するとされている（高畑, 2015）。

このように存在が認められているサヴァン症候群であるが、その特徴を有する児童生徒への教員の認識の状況などは把握できていない。さらに、そのような特徴を有

する児童生徒がいた場合、知的障害や自閉症等への指導・支援と何か異なる創意工夫がなされているのであろうか。この点について、西山・納富（2008）の研究はあるものの、サヴァン症候群への教育に関する研究は少なく、研究の必要性が示唆される。

以上のような問題意識より、本研究では、知的障害特別支援学校の教員を対象にアンケート調査を行い、特別支援学校教員のサヴァン症候群に関する認識、サヴァン症候群的な特徴を持っている子どもの症状、それに対する教員の指導・支援の工夫等について、明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

千葉県、和歌山県、兵庫県等にある知的障害特別支援学校5校の教員であった。

2. 調査方法

事前に学校への調査研究の依頼を行い、併せてその趣旨説明を行った。その中で質問紙調査の趣旨に同意が得られた学校に、調査依頼文を送付し、かつ調査研究に同意をした教員からのみ回答を得た。

3. 調査期間

調査期間は2016年8月～9月であった。

4. 調査項目

調査項目は、特別支援学校教員のサヴァン症候群の認識、これまで出会ったサヴァン症候群的な子どもの特徴・症状、困難やつまずき、及び支援・指導の留意点等に関する7個の質問項目を設定した（Table 1参照）。なお、質問の回答方式は、選択肢のある選択式と自由記述であった。

5. 分析方法

選択式の回答については、質問項目ごとに数量的に集

*兵庫教育大学大学院（修士課程）特別支援教育専攻障害科学コース 修士生

平成29年6月27日受理

**兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻障害科学コース 教授

計した。また自由記述における回答については、書かれた記述文を意味・内容から区切り、それらの区切り文を意味・内容から整理し、コード名を付与した。さらに、

そのいくつかのコードを意味・内容からカテゴリー化し、カテゴリー名を付与した。

Table 1 サヴァン症候群に関する調査の質問項目

質問内容	質問番号	質問項目	選択肢	回答方式
回答者の属性	フェイスシート	あなたについて教えてください	<ul style="list-style-type: none"> 性別 (男・女) 年齢 (20 代、30 代、40 代、50 代) 教員歴 (____ 年、うち特別支援学校教員歴 ____ 年) 	選択式
サヴァン症候群の認識	質問項目①	サヴァン症候群をご存じですか	→ はい／いいえ	選択式
		「はい」回答者のみ		
	質問項目②	サヴァン症候群とはどのようなものですか？簡単に教えてください。		自由記述
		全回答者対象		
サヴァン症候群のある子の特徴・症状、指導・支援上の留意点など	質問項目③	「サヴァン症候群」的な特徴・症状のある子ども、または「自閉症・知的障害等のある人がその障害とは対照的な優れた能力・偉才を示すこと」と定義されます。そのような子どもと出会ったことがありますか？	→ はい／いいえ → その子の診断名は何でしたか 知的障害、自閉症、サヴァン症候群、その他（記述）、不明	選択式
		「はい」回答者のみ		
	質問項目④	その子とはどのような「サヴァン症候群」的な特徴・症状を持っていましたか？		自由記述
	質問項目⑤	その「サヴァン症候群」的な特徴・症状のある子どもへの支援において、留意したことは何ですか？また、その能力を高めるために行った具体的な工夫を書いてください。		
	質問項目⑥	その「サヴァン症候群」的な特徴・症状のある子について、主なつまずきや困難は何でしたか？		
	質問項目⑦	その「サヴァン症候群」的な特徴・症状のある子には、知的障害・自閉症児への支援と異なる工夫をしましたか？ある場合は書いてください。		

Table 2 教員のサヴァン症候群への認識（自由記述のまとめ）

カテゴリー名	コード（コード数）	回答内容（抜粋）
能力	ある特定の能力（62）	<ul style="list-style-type: none"> ・ ある特別な能力が秀でて高い ・ 特別な優れたところ
	記憶力（50）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 記憶力などが突出的に良い ・ 記憶などに特別な能力のある特性を持つ人のこと
	絵画（13）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 風景を正確に絵として再現ができる ・ 描画能力などにおいて人並外れた天才的な才能を発揮する人たちの症候群
	音楽（11）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽的な才能等、すごい高い能力を有する ・ 特殊な能力があり、極立っている、音楽、芸術面（まるで写真の様な描写など）で優れた能力を発揮する
	芸術（9）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 芸術的な分野で才能を発揮する能力を持つ ・ 芸術などの分野でとても優れた才能を発揮する
	計算（8）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 優れた力を有すること（計算力等） ・ 計算など特定の分野で特別な才能を持っている
	カレンダー計算（8）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 未来のカレンダーが頭で理解できるなど、特異的に優れた能力を持つ ・ カレンダーの曜日を言い当てるなど
	数学（7）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 数学などの特定の分野において、ずば抜けた力のある方たちのこと ・ 数学や記憶、などある一つの能力が特別に抜き出ている
障害 困難	知的障害（32）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知的な障害があっても、ある特別な能力が秀でて高い方 ・ 知的な障害を持ちながら、ある一分野に優れた能力を持っている
	自閉症（32）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自閉症の中にみられる、記憶などに特別な能力を持つ特性を持つ人のこと ・ 自閉症があるが、記憶力が抜群に優れている
	発達障害（12）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特定の高い能力を持った発達障害 ・ 発達障害を持っている人で、何かの分野でとびぬけた才能を持っている
	自立生活の困難性（4）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常生活、社会生活を営む上で大きな課題を抱えているというもの ・ 生活に支障をきたすような障害を抱えている
	コミュニケーションや 対人関係（3）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発達障害であり、コミュニケーションや対人関係、社会性の問題を持ちながらも特異な能力を持ち合わせている人たちの障害 ・ 自閉症で（知的な遅れを併せ持っている場合も含め）対人関係などに生きづらさを抱えながらも、ある分野、特に音楽、美術、数学等の記憶力が突出して秀でている人たちのこと
	高機能自閉症（1）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高機能自閉症で特定の能力に関して特異な能力を持っている人
	情緒的な障害（1）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高機能（記憶力が高い）で、情緒的な障害がある
	精神障害（1）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知的障害、精神障害を持つ人で芸術とか数学とか記憶力とかに特に優れた能力を持っている人

Ⅲ．結果と考察

1. 回答者の基本情報

1) 回答者の性別、年齢別人数、教員歴と特別支援教員歴
全部で230部アンケートを回収した。アンケート回答者は男性が103名、女性が124名、未記入者が3名、合計230名であった。

回答者の年齢別の人数について、20代が64名、30代が55名、40代が47名、50代が58名、60代が3名、未記入者

3名であった。

教員歴に関して、1～5年目が58名、6～10年目が47名、11～15年目が19名、16～20年目が15名、21～25年目が18名、26～30年目が24名、31～35年目が19名、36年目以上が6名、未記入者が24名であった。

特別支援教員歴に関して、1～5年目が86名、6～10年目が50名、11～15年目が26名、16～20年目が24名、21～25年目が13名、26～30年目が11名、31～35年目が2名、

Table 3 これまで出会った「サヴァン症候群」的な子どもの特徴の状況

サヴァン的な能力		人数（割合）
・記憶力		46（36%）
・芸術	美術＋音楽	42（33%）
	美術（絵画、切り絵、折り紙、粘土を含む）	[29/42]
	音楽	[13/42]
・カレンダー計算		26（20%）
・数字		8（6%）
・その他		5（4%）
合計		127

36年以上が0名、未記入者が18名であった。

2. 特別支援学校教員のサヴァン症候群の認識の状況

1) サヴァン症候群への認識の有無（選択式）

質問項目①におけるサヴァン症候群を知っている教員は130名であり、約57%と半数以上であった。知らない教員は100名であった。特別支援教員歴から見ると、0～5年目においては、サヴァン症候群を知らない教員が多いが、特別支援教員歴が増えるにつれて、サヴァン症候群を知っている教員が多くなるという傾向が見られた。また、知っている教員の男女別では、男性が52名、女性が76名だった。

2) サヴァン症候群への認識（自由記述）

質問項目②における回答内容（自由記述）への回答者は128名であった。その内容をコード化し、カテゴリーに分類したものを Table 2 に示した。

Table 2 から、教員がサヴァン症候群の認識として、「ある特定の能力」が62コードであった。具体化された言葉としては、サヴァン症候群の能力には「記憶力」といった言葉が50コード、芸術が33コード（絵画13、音楽11、芸術9）となった。また、障害名に関しては、「知的障害」と「自閉症」が最も多く使われており、それぞれ32コードであった。サヴァン症候群の定義に即して、多くの教員が適切に理解していると考えられる。

4. サヴァン症候群の特徴を持っている子どもの様相

1) サヴァン症候群的な特徴を持っている子どもとの出会い

質問項目③では、このような子どもと出会ったことがある教員が76名で、回答者（230名）の約33%を占めた。そして、出会った子ども数も127名であった。サヴァン症候群的な特徴・症状のある子どもと出会ったことがあるという教員数は、教員1人あたり平均1.6名であった。

2) その子どもの診断名

教員が出会ったサヴァン症候群的な特徴を持っている子ども（127名）の中で、自閉症と診断されていた子どもが最も多く87名であった。次いで知的障害が29名であった。その他が11名、サヴァン症候群は0名であった。全体から見ると、自閉症と知的障害との関連が深く、特に

自閉症と診断された子どもが全体の半数以上であることがわかった。

3) その子どものサヴァン症候群的な能力

質問項目④への回答、その子どもが持っているサヴァン症候群的な能力を Table 3 に示した。サヴァン症候群的な能力に関して、記憶力を示している子どもが一番多く46人であった。次いで芸術を示している子どもが42人であり、その芸術の内訳は、主に美術（29人）と主に音楽（13人）であった。また、カレンダー計算を示す子どもが26人、数字が8人であった。

5. サヴァン症候群的な特徴のある子どもへの支援・工夫の状況

1) サヴァン症候群的な特徴のある子どもへの支援・工夫の留意点（全般、能力を高める視点）

サヴァン症候群的な特徴・症状のある子どもと出会った教員（76名）に対する、質問項目⑤への回答者は36名で、回答率は47%であった。その内容をコード化し、カテゴリーに分けたものを Table 4 に示した。そのような特徴／症状のある子どもへの支援・工夫に関して、「自己肯定感」が最も多くて、8コードであった。「能力を高める」が7コード、「SST」が6コード、「趣味を育てる」と「コミュニケーション」への支援・工夫が5コードであった。

2) つまずきや困難とそれに対する支援・工夫（知的障害・自閉症児への支援と異なる）

質問項目⑥における回答内容への回答者は48名であり、サヴァン症候群的な子どもと出会った教員数76名の割合からすると、回答率は63%であった。その内容を Table 5 に示した。子どものつまずきや困難に関しては、コミュニケーションが最も多く、17人であった。次いで、人間関係・社会性が14名、こだわりが12人となった。その他のつまずきや困難としては、行為障害、偏食、多動等が挙げられた。これらの特徴は知的障害を伴う自閉症が示すものとほぼ同じ内容と考えることができる。

一方、質問項目⑦「そのサヴァン症候群的な特徴・症状のある子には、知的障害・自閉症児への支援と異なる

Table 4 「サヴァン症候群」的な子どもへの支援・工夫の留意点（自由記述のまとめ）

カテゴリー名	コード（コード数）	回答内容（抜粋）
対人面	SST (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人情報を持ちと見ただけで覚えてしまってしまうので、取り扱いに注意した ・ 異性とのつきあい方を含めた SST を取り入れた
	コミュニケーション (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人とコミュニケーションしにくかったのが、相手の受け取り方等を支援した
サヴァンの能力	能力を高める (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・ その子（小学生）の持っている苦手な分野への支援が主で、絵画分野では場面設定の支援や評価を行った ・ よいところとして活用していた
	趣味を育てる (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一緒に音楽を楽しんだ
	表現させる機会を作る (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 積極的に本人の作品を知ってもらう機会を設定した ・ 発表や表示の機会を作った
	オリジナリティを高める(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で創意工夫させ、オリジナルな作品を作るように求めた
	興味を拓ける (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 能力は高めるよりも、他の分野に少しでも興味が向くように設定した
心理面	自己肯定感 (8)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 数学についての記憶力が高いことに気がついたので、計算問題などに取り組むことで、自己肯定感を高めた ・ 彼らの得意な力として認め、こちらからも彼を頼るようにした
	学習支援 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 難しい漢字を題材にして、学習する際、「うどん」「ばら」などの漢字をゲーム化して工夫した ・ エラーレス学習を行った
	心理の安定 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 心理の安定を求めたいときに集中できる時間を作った
	レジリエンス (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ レジリエンスを大切にした
	自閉的な傾向を無理に直そうとしない (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自閉的傾向を無理に直そうとしなかった
	目標を持たせる (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次の目標へのステップを持たせた
	進路指導 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「卒業後、就労先でうまくやっていくためには」という指導を優先させた

工夫をしましたか？」という質問に回答した教員はわずか10人であったが、それらの自由記述は多くの要素を含む多彩な記述がなされていた。そのつまづきや困難に対する支援・工夫として挙げられたのは、「自己肯定感（8名）」「能力を高める（7名）」「趣味を育てる（6名）」であった。コミュニケーションへの支援・工夫を回答した教員は5名、人間関係・社会性に対応する支援・工夫として、SSTが5名であった。コミュニケーションや人間関係という特定の領域というよりも、成長を促す上での大切にしたい視点やポイントが多く挙げられた。

アンケート調査の結果から見ると、教員が子どもの個々の様子を捉えて、つまづきや困難に対して多側面から指導・支援を行っていることが示された。特に、サヴァン症候群の特徴によって、教員が支援・指導は、主に「能力を高める」と「自己肯定感を高める」となっていた。そして、回答内容から見ると、子どもの能力を高めるこ

とによって、自己肯定感を高めるという支援・指導方法を行っていることが示唆された。しかし、それらの指導・支援が、サヴァン症候群的なある特定の優れた能力は認められているものの、それを高める指導・支援の重要性が十分に意識されているとはいいがたい状況であろう。つまり、教員が支援・指導する際に、子どもの様子やサヴァン症候群的な「強み」を重視しているとはいいがたい。強みを伸ばすといった視点に立ちにくいといった現状もあるかもしれない。たとえば、自閉症児が持ち合わせたサヴァン・スキル（粘土造形）と同領域に属する苦手な課題（デッサン・スキル）への指導報告（園山・梅津・勝浦・倉光, 2007; 勝浦・遠藤・園山, 2008）がある。芸術等への才能開発（伊勢・首藤, 2015）といった、サヴァン症候群的な能力を活かすといった視点を大切にする必要性が指摘できるであろう。

Table 5 サヴァンのな子どものつまずきや困難とそれに対する支援・工夫

子どものつまずきや困難		知的障害・自閉症児への支援と異なる支援・工夫	
項目	人数	項目	人数
コミュニケーション	17	自己肯定感	8
人間関係、社会性	14	能力を高める	7
こだわり	12	趣味を育てる	6
無興味、不関心	5	コミュニケーション	5
情緒の不安定	4	SST	5
学習面	4	表現させる機会を作る	4
感覚過敏（音）	3	学習支援	3
パニック	2	心理の安定	2
その他	9	レジリエンス	1
		視点を伸ばす	1
		オリジナルな工夫	1
		目標を持たせる	1
		進路指導	1
		自閉的な傾向を無理に直そうとしない	1

IV. 文献

- 伊勢正明・首藤晃（2015）. 知的障害児の美術表現と施設職員の鑑賞教育. 帯広大谷短期大学紀要, 52, pp.51-62.
- 勝浦暁・遠藤悦史・園山繁樹（2008）. 粘土造形にサヴァン・スキルを示す広汎性発達障害児のデッサン・スキル指導. 障害科学研究, 32, pp.93-106.
- 西山華・納富恵子（2008）. サヴァン症候群への教育についての一考察. 福岡教育大学障害児治療教育センター年報, 21, pp.47-55.
- Pring, L. & Hermelin, B. (2002). Number and letter: exploring an autistic savant's unpracticed ability. *Neurocase*, 8, pp.330-337.
- 園山繁樹・梅津大輔・勝浦暁・倉光晃子（2007）. 広汎性発達障害男児における粘土造形サヴァン・スキルとデッサン・スキル指導に関する事例検討. 障害科学研究, 31, pp.57-64.
- 高畑圭輔（2015）. サヴァン症候群. 臨床精神医学, 44(2), pp.249-254.
- Treffert, D. A. (2002). *Extraordinary people: understanding "idiot savant"*. New York: Harper & Row. (高橋健次訳 (1990) なぜかれらは天才的能力を示すのかーサヴァン症候群の驚異ー. 草思社).